

---

# 想いは儚い

雪之丞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

想いは儂い

### 【著者名】

【雪之丞

N5333D

### 【あらすじ】

主人公・井出俊樹はある時期になると思い出に浸るゝ別れくた彼女との思い出に…いつものように、いつのも場所で俊樹は彼女に想いをはせる…しかし、今回は少し特別な…忘れぬ日になるのだ

## 第一話 春風と軒窓（前編）

えー…恋愛っぽい感じなんで、ジャンル恋愛にしましたが…  
正直、微妙です…  
自分でもカテゴリわからん

## 第1話 春風と再会

寒い季節が終わり告げた

少しだけ暖かさを感じられるこの時期になると…

俺は、決まってある場所に足を運ぶ…

いつものように、その場所…

ごく普通の交差点に着くと、俺はガードレールに腰掛けた  
そして煙草を銜え、出勤に急ぐ人々を眺める。

春になつたとはいへ、朝はまだ冷える日が多い

そんな中でも人々は寒さに耐え、白い息を吐きながらも歩みを進め  
ていく

時々、俺の方を横目でチラリと見る人もいるが、その殆どは気にも  
とめずに素通りをする。

今の俺は、誰にも気にされない存在…

そり…それで構わない…

俺は誰かを探しているわけではない…

ましてや、何かを待つていてるわけでもない

ただ、ここにいるだけだから…

そんな俺に気が止めるヤツなんて、中々いないうつ…

まあ、正直なところ気されても困るんだが…

俺は煙草を吸い終えると、携帯灰皿に吸い殻を入れた

今の俺は…この吸い殻と同じ…

残りカスでしかない…

脱け殻になつた今の俺には…

何もできやしない…

目の前を通り過ぎていく無数の人々…

その流れを見ていると、突然昔の記憶が走馬灯のようになづつ甦ってきた…

…そう…だから…  
…ここに来れば…  
だから…いや、俺は此処にいるんだ…

(お前)との思い出を忘れないでいられるから…

自分でも未練がましいって思う…

…こんな風に弱い俺のところ…

おまえは嫌いだったな…

それでも…

どんなに参めであつても…

俺は最後の絆にしがみついている…

そんな感傷に浸る俺の前を、誰かの捨てたビニール袋が勢い良く通過していった

今日はいつもより風が強い…

空気もやけに冷たく感じる…

そうか…今日はあの日と良く似ているんだ

お前と別れるところになつたあの日…

出会いの時も…

別れの時さえも…

俺たちは風の中こいつもこいた気がする…

お前がいなくなつてから…

一人で過ごす事にも大分慣れた…

けれども、俺は相変わらずダメなヤツだよ

独りの休日に…

俺は…何したら良いか解らないんだ…

お前が今俺を見たら…

きっと笑うだろうな…

おまえの前で俺は…

強がつてばかりだった気がする…

少しでも強い男であるとしていたんだと思つ…

お前をいつでも守れるような…

でも、冷たくしてしまつ」ともかくたと感じてるよ…

悪かったと思つてゐ…

本当に…

今、お前に逢えたなら…

伝えたいことが…

してやりたいことが…

沢山あるんだ…

願わくば…

もう一度逢いたい…

叶わない望みだと解つても…

どのくらい時間が経つただろうか…

気が付くと、人通りが少なくなっていた

腕時計で時間を確認する

九時一十分…

どうやら通勤ラッシュの時間は過ぎたようだつた

彼女のことを考えていると、いつも時間が経つのを忘れてします…

(……これで静かに考えられる…)

周囲に入気がなくなると、俺は再び自分の世界に入ろうとした…

しかし、その思惑は次の瞬間に阻まれることになる

不意に、誰かが隣に腰掛けた気配がしたのだ

だが、別に珍しいことではない

稀にいるのだ…

「…」

何をしている？とか…

何故ここに居る？とか…

大抵は、どうでも良いような事を尋ねてくる

そして、俺がここにいる理由を答えてやると…

何も言えず…

何も言わず而去っていくのだ

決まつりきつたやり取りは…

ウンザリだ…

だから俺は、その人物を無視することに決めた

隣からは、仄かに甘い香りがする…

どうやら物好きは女のようだ

まあ、それが分かっても何も変わりはしないが…

『何してんのよ…あんた…』

唐突に隣人は話し掛けてきた

隣から発せられた声は…

意外にも、俺にとつて聞き覚えのあるものだった

俺は言い慣れた…

しかし、久しぶりに使ひ名前を呼んだ

『雪菜…？』

春風と共に訪れた再会…

これは俺に何をもたらすんだらつか…

## 第2話 言葉は残酷

突然、聞こえた言葉。

それは聞き慣れた…  
懐かしい声…

だが、俺の知つている…

昔の様な、柔らかく、朗らかな感じは無かつた

何処か寂しげで…

無理に明るい声を作つて…

俺はそんな感じがした

声の主が誰だかは、無論すぐ解つた

木暮雪菜…  
こぐれ ゆきな

愛するという意味を教えてくれた女性…  
本当に好きだつた彼女…

直ぐにでも振り返りたかった…  
けど、振り返れなかつたんだ…

俺には…

… 勇気が無かつたから…

『久しぶりへ 敏樹。何してんの?』

昔と変わらない口調で、俺の名前を呼ぶ雪菜

だが、俺の口は動かなかつた

何て答えたら良いのか…

その時の俺には解らなかつたから…

嬉しさとか…

驚きとか…

色々な感情が混ざりあつて…

そり…あの時、俺はひどく混乱していたんだ…

くそ…本当に情けない男だ…

『…なに無視してんの…?』

哀しげで…不安そうな問い掛け…

『もしかして…私のこと忘れた…とか?』

そんなこと…

あるわけ…あるわけない…

お前のこと…

忘れたことなんて…

何一つ無い…

『無視なんてしてねえよ…以前…ひやんと呼んだじやねえか…何の用だよ…』

これが…俺の…

虚勢を張った精一杯の言葉…

強がりなれば、崩れてしまいそうだったんだ

『相変わらず無愛想…』

俺の愛想無い返事を聞いて、雪菜が安堵したような気がした

『無愛想で…悪かったな…』

彼女のそんな感じに俺も安心する

『ま、敏樹が愛想良くても、気持ち悪いから…』

彼女は俺に馴染みある、からかう様な口調になっていた

『ふん…皮肉を言いに…わざわざ来たのかよ?』

そんな雪菜につられてか、俺も話し方が昔に戻っていく

『違う違う。何じてるのか、聞きこきた』

相変わらず彼女を見ることができないが、いつやつて話すのだけだ…

今は…

『…何じてるか聞きこきたくて…なんだけていいだろ…』

つこ、ぶつかりつつ答えてしまつ

『ふ〜ん…まあ、大体想像つくけど…』

彼女は言葉に含みを持たせた

『…んだよ…』

少し小声で僅かばかりの反抗

『アホじゃない?昔の彼女引きずっとまあ、どうするの?..』

からか?…とこつとも少し小馬鹿にした感じで彼女は言った

『…悪いかよ。思こ出すのは、お前まだ愛情があるからだよ』

へ歸らひよつこぬく

『「うわ～恥ずかしくない、それ？そして未練がましい台詞～…。本当にアホな彼氏』

心の底から呆れたと言つた感じの言い方

『「ひるせえよ..じゃあ、そんな俺と付き合つていたお前は、もっとアホな彼女じやねえかよ』

売り言葉に買い言葉  
つい毒吐いてしまつ

『あはは。それはいえてるかもね～』

俺の皮肉など微塵も気にとめず、彼女は笑い飛ばした

『マジで…アホだつたよ、お前…』

昔のことを色々と思い出す

良いことだけじゃない、悪いことなんでも…

『ひどくない？てか、そんなに？そんなつまつまなかつたけどな～』

ちょっとムツとした感じ…

だが、それでも雪菜は会話を楽しんでいるように思える

『…こやいや、そんなにだから。だつてよ、俺、はじめてみたよ。眼鏡を掛けて眼鏡探してる人。あれ、コントの中の世界だけかと思つてた、マジで笑つたわ』

『…「ひりせー！あれば寝呆けてただけ！」』

俺の言葉を、笑いながらも全力で否定する

『へ～…起きて四時間もして、君は寝覚めるのかい?』

雪菜の矛盾に俺は突っ込む

『…なに?何が言いたいの?』

彼女の声が素のトーンになる  
でも、引くに引けない俺は置み掛けた

『やばくない、それ?』

『やばくない』

はつきり言いきる彼女  
そんな彼女に対して俺は更に続ける

『変な感じ、きつぱりしてるねえ～相変わらず』

『悪い?』

『いや…悪いんだけど…』

雪菜のハッキリとした態度に、俺は一瞬圧された  
そして、怯んだ俺の口からは本音が流れだしていく  
多分…変わらない空気に油断したんだ

『でもさ、それ抜きにしても、お前はアホな彼女だったから…』

『だから、どうらへんがよ?』

『今、ここにいるけど、とか…』

昔を思い出す

当然、あの日の事も…

『何?意味解らないんだけど?』

本当に分からぬといつた感じの雪菜の声

『…気が付いてないのか?』

呆れながらもホッとする俺

『…だから~なんなのよー?』

突然キレる彼女

俺が言葉に含みを持たせるといつもいつ…  
変わつてない…相変わらずだ

『おまえさ…死んだんだぜ…?』

必死の思いで核心を吐き出した

使いたくなかった言葉…

…これは諸刃だ…

それでも…

言わなければならぬ事だつたんだ…

### 第3話 想いは悲壯

俺はいつもそりゃだ…

無神経な言葉を使って大切な人を傷つける

俺が吐き出した…「もつとも言いたくなかった言葉」を聞くと、  
彼女からは哀しげな雰囲気が一瞬だけし…

『わかつてゐるわよ…そんなこと…』  
と、少し悲しそうな返事をした

『なんで…なんだよ…』

今でも、何故こんなことを言つたのかわからない  
自分でも意味なんてない…いや、解つてない質問だったと思う

『なんで…つて…』

俺のした問い掛けに彼女は戸惑つていた

『……………何で死んじまつたんだよ……………』

吐き出された…本当の言葉…

もう抑えることなんて…できない…

『なに、帰り道に事故にあつてんだよ…俺が送るつて言つたの拒否  
して…事故にあつてどうすんだよ…大丈夫つて…大丈夫つて言つて  
たじやねえかよ…全然、大丈夫じやねえじやんかよ…』

いつの間にか俺は泣いていた

この情けない姿が俺の本当の姿なんだ…

俺は惨めになりながらも言葉を続けてる…

『……しかも、飲酒運転だつたらしいじゃないか……お前、全然悪くないじやないかよ……何、俺より先に死んでんだよ…………俺より先に逝つたお前は……やっぱアホな彼女だよ……』

『…………』

俺の心を彼女は黙つて聞いていた

何も言わず……

ただ……ただ黙つていた

『黙るなよ……なんとか言えよ……冷やかしに来ただけかよ……こんな言葉を言つつもりはなかつた……

責めるような言葉を……

『……あんたが馬鹿なことしないか心配だつた……』

包み込むような優しさのある彼女の声

でも、とても辛そうだ……

『……なんだよ……馬鹿なことつて……』

『例えば……復讐とか?』

そらりつと言つ彼女

『……明るく言つなよ。大体……復讐する相手がない……』

ツツ「ミながりも、苦笑いになる

『なんで?』

『 なんで、って…知らないのか…？…………お前をひいた相手…翌日に自殺してたんだよ…』

何処かに吐き出せたら…少しさは楽になれたかもしねない…  
だが…

悲しみと憎しみに支配されていた時、警察から言われた宣告

容疑者は見つかりました

ですが…既に亡くなっていました

おそらくは自殺したものだと想われます…

何処にも行き場のなくなつた思いは…

己の内に閉じ込められた

『そつかー…そつなんだ』

『ああ…』

『もしや…』

『ん?』

あっけらかんと『ひつ彼女に、俺は相槌を打つしかできなかつた

トーンを落とした声

彼女がこの感じをする時はマジな話をする時だ

『もし…もしも相手が生きてたら…復讐した?』

声に怯えがある

聞くのを何か恐れているような…

『…どうかな…したかもしれないし、しなかつたかもしれない…』

自分でも…答えは分からなかつた

…俺は…どうした…?

『ちょっと…ハツキリしないなあ…。仮にも彼女の仇を討とうとか  
考えないわけ~?』

安心したのか、彼女の口調は再び仮面に覆われた

『…内緒…だな』

おもいつきり意地悪く答えた

『なによ、それ~!』

彼女は呆れ氣味だが、楽しげだ

こうしてみると昔に戻つたみたいだ

でも、前とは…#とは違つ

何故なら…

俺はまだ彼女を見ることができないんだから…

## 第4話 彼女の想い

…桜が見たい…

彼女は突然、そう言いだした

何故急に桜なのか解らないまま、俺は雪菜の後についていった  
程なくして着いた場所は、交差点から一番近い中学校の桜並木だった

移動中、俺はあることに気が付いた

彼女はどうやら他の人には見えていないらしい

歩きながら彼女と話していたから、見かけた人は正直不気味だった  
ろつ

可笑しな電波を受信している人と思われていたかもしね

あの時は全然気にならなかつた…

だが、俺は相変わらず彼女を見れないでいた

気配や目端に見える人影、声で彼女がいることを確認していた

『綺麗だねえ～』

彼女の無邪気にはしゃぐ声が聞こえる

『どうして、桜を見たかったんだよ?』

『だつてさあ~…』

彼女は一呼吸置き

『一緒にお花見、したことなかつたから…』

『そりゃ…』

『そうだよ。』

そうこうと二人の間に暫らく沈黙が流れた

『あれ…わざの質問の答えなんだけじせ…』

『ん?』

唐突に彼女は口を開いた

『さつきの…何しにきたんだ?つてやつ』

『あ~…』

心配だつた…てヤツか…

『実はさ、もう一つあるんだよね~』

『…もう一つって…何?』

『…あんたに逢いたかったんだ』

『…』

『ま、総合的に言えば心配だつた…かな?』

少し悪戯っぽく彼女が言つ

『つて結局、同じじやん!てか、死んだ人間に心配される俺つてダメじゃん!』

『何いつてんの？あんたダメ人間だから。自覚なし？』

彼女はハツキリものを言う

俺はそれが心地良かつた

『えええええええ！かなり酷いんですけど！』

大げさに驚いてみせる

もちろん話の流れに任せた演技だ

『いやいや、死んだ人間に心配させるほうが酷いから  
おどけて言う彼女の笑顔は可愛らしい…はずだ

それを見れない自分が悔しかつた

『心配させるなんて…………そんなつもりはねえよ』

口調が強くなってしまった

自分に対する、どうしようもない苛立ちが出てしまったんだと思つ

『じゃあさ、何で命日と誕生日、毎年墓にくるわけ？』

意地悪く、しかし悲しそうな声

『いいじやん。迷惑掛けたねえし』

全力での強がり

『あたし、そういうの嫌いって知ってるよね？かなり迷惑なんですね  
けど～？』

『迷惑つて…どこがだよ？』

『全体的に重い』

『俺の勝手だらうがよ…』

実際は彼女の言う通りだったのかも知れない

だから、俺はハツキリ言い返せなかつたんだ

『……あんたさ、あたしが死んでから……まともな生活……してなくない  
?』

口調から悪戯っぽさが消えた

……淋しそうな声

『できないんだよ。前みたいには……』

彼女がいなくなつて、俺の心には大きな穴が空いた  
心はある時から折れてしまつた

『……本当、ダメだね～』

『……自覚してるよ』

『……ふ～ん』

俺の言葉を聞くと、彼女は何かを考え込んでいる

『で、今は、彼女いるの?』

『唐突だな、おい……てか、分かるだろ……?』

『いいからー答えてー!』

投げやりな答え方が気に障つたのか、彼女にしては珍しく強い口調  
だつた

『なんだよ……急に…………いないよ』

彼女の迫力に驚き、一瞬怯み、声のトーンが落ちる

『……だよね。じゃ結婚は？考へないの？』

彼女は質問を畳み掛けてくる

『相手いなのに結婚ないだろ…』

『いや、考へるかじつかつて話』

『……考へられないな』

俺の言葉を聞き、彼女が深い溜息を吐いたのが分かった。

暫しの沈黙の後、彼女はゆっくりと口を開いた

『あのセ…いい加減セ…忘れてよ…』

『……………』

涙声だった

俺のせい…

俺が彼女を泣かせている…

『あなたの気持ち解るけど…逆の立場なら私もそつなるだらう』

『…』

『なり…』

言い掛けた俺の言葉を遮り、彼女は続ける

『相変わらず自己中だね…私の…私の気持ちは考えてくれないの

…?』

『それは…』

俺が何を言おうと言い訳でしかない

そして、感情的な彼女はそんな言葉を待つていいわけではない

『ねえ…どうしていつもそうなの…? 何でそんなに自分勝手なのよ…? 最後なんだから…一つくらい…私の言つ事聞いてくれてもいいじゃない…』

『悪い…』

彼女がこんなに感情を表に出すなんて珍しかった  
そんな彼女に俺は謝ることしかできなかつた

最後…

その言葉が頭の中に駆け巡つていた

『あんたがそんなんだから…』

彼女の声が泣いていた

『いめん…』

俺は自然に振り向いた

桜舞い散る中…

そこには昔と変わらない彼女が泣いていた…

俺は思つたんだ

頭が変でも…

幻覚でも構わない…

この一瞬が...永遠に続けば良こと...

## 第5話 彼女の笑顔

彼女の姿を見てから、俺は他愛のないことを機関銃のようにな話し続けた

話が途切れたら彼女が消えてしまい感じがしたから…

いつのまにか陽が陰つていて  
空が雲で灰色に覆われていく

『あ、  
雨…』

突然、雨が滝のように降りだした

『おい、濡れ…』

彼女の方を見ると…

俺は見てしまった

彼女の体をすりぬけ、雨は地面を濡らしているのを

それを見たら…

どうしようもなく悔しくて…

俺は声を押し殺し…泣いていた

あの時の俺は…気が付いたら、彼女が濡れないよう、頭上に上着を広げていた

目の前の現実を受け入れたくなかったからなのか、今でもよく分からぬ

『私は大丈夫だから……だつて…』

哀しげな声で、淋しそうな目をしながら彼女は言った

『……うな！……お願いだから……その先は……言わないでくれ……』

言い掛けた彼女の言葉を俺は遮った

その言葉の続きを聞きたくはなかつたから…

俺は涙を流して泣いていた

情けないほどボロボロと…

悔しくて、悲しくて…

どひじょひもなく涙が溢れた…

雨がそれを隠してくれたのが救いだつた…

これ以上…彼女に情けない姿を見せないで済むから…

『……『じめんね…励ましにきたつもりだつたんだけどな…』

そんな俺を、彼女は悲しみと優しさの交じつたような微笑みで見つめていた

『……ありがと…な…』

彼女に俺は、そんな言葉しか言えなかつた

『……うん…あ、晴れたね…』

『……ああ…』

いつのまにか雨は上がり、空は晴れていた

『天気雨…だつたのかな?』

『…かもな…』

彼女の声が落ち込んでいく

その感じで俺は理解した  
あの雨は…合図だったのだ…と

『…じゃ、やるやうに行かなあや…』

『…そう…か…』

彼女との再びの別れ

も…あつと奇跡は起らないであら…

『…うん…なんか色々と急で、『めんね…』  
はにかむように笑う彼女は…昔と変わらず愛い…』

『…謝んなよ…いや違つた…うん、良かつたよ…』  
自然に出てきた言葉だった  
自分でも意味は良く分からぬ

『…何が?』

彼女のもつともな疑問

『…いや…逢えてさ…』

単純な答えただ

『…ん、そつか。なら来て良かつたかな…』  
悪戯な笑みをする彼女

抱き締めたい気持ちを抑えるのが大変だ…

手を触れることは出来ないだろ、う  
きつとすり抜けてしまふだらうから…

『…ああ

『頑張つてよ?』

『ああ…』

『腑抜けた返事だなあ。あんたはさ、あたしが好きになつてあげ  
た人なんだよ? もつとしつかりしてよね』

頭の中で彼女との思い出が回つてこる

『まつたく…あ、そつそつ…はい、これ

小さな封筒を俺に渡す彼女

『なんだよ、これ』

受け取った手紙は本物だ

面食らう俺

『プレゼント ほら、有り難がりなさいよ

『え? てか、どうせつて…』

俺の疑問を彼女は察して、直ぐに答えた

『それ、いっうちに来て書いたから  
簡単に言つ彼女

『ああ、やうなん…』

『あーもつ時間、ギリギリ！ヤバ！んじゃね！  
昔と同じように去りうとする彼女  
でも…もうへ今までくはない…

いやだ…行かないでくれ…

なんで、そんなに普通なんだよ…

離れたくない…離したくない

だが、俺の口からは気持ちとは裏腹な言葉が出てきた

『うん、それじゃ…』

最後まで格好つけて…

結局は素直になれなかつた

彼女のいなくなつた世界で…

俺はまた一人になるんだ…

## 第6話 最後の贈り物

彼女は俺に贈り物をして…逝った

去りぎわ…彼女は俺に口付けをした

そして…

気が付いた時には彼女はいなくなっていた…

『なんだよ…おまえは触れんのかよ…ずるいじゃねえかよ…』

俺は一人、彼女のいた場所を見つめながら、彼女の残した手紙を見つめていた

前略、敏樹

あなたがこの手紙を読む頃

私はまたあなたの前から居なくなってると思います

条件付きで來たから、かなり慌ただしかったんじゃないかな?

向こうも手続きだとかで、色々大変なんだよね~

かなり無理してきたんだから、感謝しなよ!

あなたの様子、観てたけど…

… らしくないよ？

あなたは自分勝手、自己中が売りでしょ？

悩んで落ち込んでるなんて、ガラじやないでしょ？

傍に居てあげられないのは、本当にゴメンだけ…

大丈夫！

あなたは私が信じた人なんだよ？  
だから、もつと自分に自信もつて！

うん、きっと上手くいくよ！

私が保障するよ！

あなたにお願いがあります

これから恋をして、また誰かを好きになつてください

あなたは生きてるんだから  
恋愛や仕事、しつかりやって、しつかり生きて！

それで結婚でもしてや

奥さんと一緒にこつちにきなさいよ！

楽しみにしてるからね

あたしは向こうで氣長に待ってる

言いたいこと

まだまだ沢山あるけど

長くなるから、次で最後にするね

あなたのこと

本当に好きでした

好きになつてくれて

ありがとう

付き合つてくれて

ありがとう

ああ～！はずい！

こんな私のキャラじゃないね

色々大変だと思うけど  
頑張りすぎないでね？

絶対に無理はしないでください

あなたは一人で抱え込む人だから…

それじゃ、また逢えるまで…

さよなら、敏樹

雪菜より

ああ…わかつたよ  
ありがとう

もう後ろは見ない

お前に心配かけないよ

お前を忘れはしない  
けれど過去には囚われない

俺、前に進んでみるよ

昔も  
今も

俺は変わらずお前を愛してる

お前以上に愛せる人…見つけられるかな…  
…いや、見つけないといけないな…

お前との約束…だものな

晴れない空はない…か

どんな雨もいつかは止む…

俺はこの青空の下を…これからどう進む…

## 第6話 最後の贈り物（後書き）

かなりグダグダになってしまいました…  
こんなのが最後まで読んでくださった方…感謝感激です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5333d/>

---

想いは儂い

2010年10月11日01時49分発行